

第3回アジア未来会議における特別会議

第10回SGRAチャイナ・フォーラム

# 「東アジア広域文化史の試み」

日時： 2016年9月29日（木）19時～21時

会場： 北九州国際会議場

主催： 渥美国際交流財団関ログローバル研究会（SGRA）

共催： 清華東亜文化論壇

助成： 東京倶楽部

## ■ 開催経緯

公益財団法人渥美国際交流財団関ログローバル研究会は、2014年と2015年に清華東亜文化講座のご協力をいただき、北京をはじめとする中国在住の日本文学や文化の研究者を対象として開催しました。本年は、第3回アジア未来会議に合わせて日本の北九州市で開催し、過去2回のSGRAチャイナ・フォーラムを踏まえ、今後、東アジアにおける広域文化史の試みをどのように推進していくか検討します

## ■ フォーラムの趣旨（素案）

清華東亜文化論壇のご協力を得て北京等で開催した過去2回のSGRAチャイナ・フォーラムにおいて、下記の通り、日中韓を中心とした東北アジア地域の近現代史を、文化と越境をキーワードとして検討した。

◆東アジアにおける「美術史」が、実際の歴史的な美術の交流と実態を反映しない、各国ごとの一国美術史として成立した背景には、19世紀の華夷秩序の崩壊と以降の東アジア世界の分裂、その中で各国がそれぞれバラバラに、自国の美術史を構築してきた経緯がある。したがって、実態を反映した「東アジア美術史」の構築は、東アジアが近代を超克できるかどうかの、一つの重要な試金石となることが予想される。

（第8回SGRAチャイナ・フォーラム「近代日本美術史と近代中国」：佐藤道信「近代の超克—東アジア美術史は可能か」より）

◆従来、東アジアの歴史を語る時、ほとんどの識者が古代の交流史と対比して、近代の抗争史を強調し、両者の間に一つの断絶を見出そうとしてきた。（略）しかし、もしこの間の三国間の文化的交流、往来の足跡を精査すれば、そこには近代以前とは比べられないほど多彩多様な事実、事象が存在していることに気付くだろう。そしてその多くはいずれも西洋という強烈な「他者」を相手に、互いの成果、経験、また教訓を利用しながら、その文化、文明的諸要素の吸収、受容に励む努力の跡にほかならない。その意味で、東アジア、とりわけ日中韓三国はまぎれもなく古来の文化圏と違う形で西洋受容を中心とする一つの近代文化圏を形成していたのである。

（第9回SGRAチャイナ・フォーラム：劉建輝「日中二百年—文化史からの再検討」より）

本フォーラムでは、過去2回のフォーラムの論点をあらためて日本における国際会議で紹介するとともに、その成果を踏まえ、日中韓のいわゆる歴史問題の解決への取り組みのひとつとして、今後このテーマをどのように展開していくかを検討する。

## ■ プログラム（案）

総合司会： 朱 琳（東北大学大学院国際文化研究科）

【問題提起1】： 塚本麿充（東京大学東洋文化研究所）

### 「境界と国籍—“美術”作品をめぐる社会との対話—」

近代の国民国家が要請した“美術”制度の研究は、近年の日本の学界での大きなトピックであった。そこでは様々な事物の起源や、それを語る言説の恣意性が明らかにされてきた。これらの研究の蓄積をもとに、今後どのように新しい東アジア美術史を語るすることができるのか、このことを考えることが、本稿の課題である。

近代の国民国家の創出とともに“美術”におこった大きな出来事は、作品に“国籍”が付与され、分類が行われたことであろう。人間もそうであったように、「モノ」には特にその生産地によって個々の国籍が与えられ、近代における国別歴史記述のなかに取り込まれていった。この生産地主義ともいべき思考法は、文物は国土と民族に付随すると言う強固な前提

をもとにするものであった。

しかしながら実際、豊饒な「モノ」の世界に身を置いてみれば、そのように明快に国籍を分類できる“作品”は、非常に少数であることに気が付く。東アジアを往来した人々が多様な価値観を持っていたように、そこで作られた「モノ」が持つ価値観も多様である。ここでは日本に伝来した中国・朝鮮絵画、そして福建、広東といった中国の地方様式や琉球絵画といった、マージナルな地域で生み出された作品を取り上げ、「国家」という大きな物語に収斂される以前の、境界で育まれた豊かな地域文化を考察する。そのことで今後の新しい東アジア美術史のあるべき方向性について考えてみたい。

【問題提起2】：孫 建軍（北京大学日本語文化学科）

### 「日中外交文書に見られる漢字語彙の近代」

公文書に使用される用語が、公文書の法的権威のもと、次第に認められ、定着していくことが指摘されている。公文書の一つとして、外交文書は往々にして異なる言語の対訳が存在することから、用語使用の対照研究にとって好材料と言えよう。本稿では1871年に日中間で調印された最初の外交条約である『日清修好条規』から1972年『日中共同声明』までの100年間の外交文書を対象に、日中語彙交流の見地から漢字語彙の使用状況、とりわけ同形語の変遷、特徴を探ってみる。

ほぼ10年間隔で外交文書を整理してみると、同形語彙の一致率が高いものから低下し、また高くなっていく傾向がはっきりと見て取れる。また、漢文から近代文体、古い漢字語彙から近代語へと変わっていく形跡が顕著である。日本語では、大日本帝国憲法など、法的基盤が整備されるにつれ、1890年代より外交文書における近代語彙が急速に増加した。それに対して、中国語では、日清戦争直後の外交文書に大きな変化が見られなかったが、1910年代後半より、日本製近代漢語が急激に多くなり、文体も大きく変わった。戦争期の40年代にはほぼピークを迎え、現代中国語と日本語の同形語の基盤が固められ、現代に至る。戦争にあっても、語彙に特化した文化交流が盛んだったのである。近代漢語の移動は文化交流、ひいては日中近代史の一部である。外交文書からも日中近代史の側面が確実にとらえられると言えよう。

【円卓会議】

進行： 孫 軍悦（東京大学文学部）

討論者： 王 中忱（清華大学中国文学科）

趙 京華（中国社会科学院文学研究所）

劉 曉峰（清華大学歴史学科）

董 炳月（中国社会科学院文学研究所）

佐藤道信（東京藝術大学芸術学科）

木田拓也（東京国立近代美術館）

劉 建輝（国際日本文化研究センター）

稲賀繁美（国際日本文化研究センター）

林 少陽（東京大学大学院総合文化研究科）